

あしどり



第 105 号

2020 年 8 月
日本野鳥の会三重 <http://miebird.org/>



今年、2020年3月中旬に会員の方から団地へ繋がる道路の橋周辺にチョウゲンボウのつがいが出て、交尾をしているから観察へ行きませんかとお誘いがあり、見に行くことにしました。そこは県道と団地を繋ぐ大きな橋で下には水田が広がっ

ています。その水田を毎日散歩されている地元の方がチョウゲンボウのつがい仲良く狩りをしているのを微笑ましく観察されていたそうです。そして何回も交尾をしているのを見て連絡をいただきました。

交尾の確認

3月20日、案内されたところへ見に行くと橋桁や電柱につがいとまっているのを確認。しばらく静かに観察していると最初は警戒していたものの、私達が遠くへ移動すると安心したのか交尾を始めました。1時間ほど見ていましたが、2度も交尾を観察できました。これは橋の中の隙間で営巣するかもしれないし、雛も見られれば嬉しいねと話しながら歩いていると気になるものが目に付きました。それは工事予告の看板で、いつから始まるかは書かれていませんでしたが年末終了とだけ記載されています。皆で営巣時期に始まらなければいいねと話しながらその日は帰りました。



交尾するチョウゲンボウのつがい

目次

チョウゲンボウの巣立ち	2
表紙の言葉	2
滋賀、岐阜、三重、愛知各県における	
近年のカワウ個体数変化	4
編集部よりお知らせ	8
津市海岸におけるシロチドリの繁殖 2020年	9
海岸協定締結	9
全国鳥類繁殖分布調査 ～最終年の状況と課題～	10
木曾岬干拓地のさらなる開発計画と	
三重県によるモニタリング調査について	12
わたしの野鳥ノートから その2	12
鈴鹿青少年の森の野鳥	13
山の鳥 一大台ヶ原の魅力	14
畑仕事と野鳥	16
事務局だより	17
事務局からのお願い	17
野鳥記録	18
探鳥会予告 (9月-11月)	21
探鳥会報告 (2020年4月-2020年6月)	22
編集後記	24

表紙の言葉

メジロの巣立ち

津市 石原 宏

住宅団地の一角、小さな手づくりの我が家の庭です。新型コロナウイルスで騒がしい5月4日のことです。新芽で茂った一本のヤブツバキの剪定をしようとしたところ、突然メジロの騒ぎ声。この時期すぐに営巣しているのでは・・・と思いました。

数十年も住んでいて初めてのことです。この日から室内からスコープでの観察の始まりです。すでに3羽のヒナがいて親鳥がさかんに餌を運んでいました、そして、5月10日の朝、突然の巣立ちでした。

よほど、我が家の庭が気に入ってくれて、安全安心と思ってくれたのだと感激です。

残っている巣と巣立ちの時の写真を参考に描いてみました。

工事の準備

1か月ほどたったころ地元で観察されている方から連絡があり、橋の隙間で営巣して雛が生まれた様だとのことでした。しかし、悪い事に心配していた工事が連休明けに始まると予告看板が設置され、関係者が準備しているからどうしようと言う相談でした。その日はもう夕方です工事関係者に連絡することもできなかったので、取り敢えず発注者の三重県四日市建設事務所へ巣の保護と繁殖への配慮を求めるメールを送り、翌朝電話をしました。担当者も状況がつかめていなかったため、建設会社の責任者と相談し改めて連絡しますと言う事でした。その後、私も他の会員の方達と様子を見に営巣場所へ向かいました。

営巣の状況

4月28日、営巣場所の橋へ到着して巣を探すと、ある隙間にたくさん糞が付いており、双眼鏡で確認すると奥に座っている雌がいました。写真を撮ってみると、まだ産毛の雛もいました。何羽いるかは分かりませんが、巣立ちまでは当分かかる事が分かります。その日の夕方に四日市建設事務所と建設会社の担当者で状況を確認しながら配慮していただく場所を相談して了解をいただきました。これでまずは一安心です。



雛に餌を持ってきたチョウゲンボウ雌

連休中は工事もなく、親も忙しそうに子育てをしていました。まず雄が狩りを終えると大きな声で鳴き、巣の雌へと合図を送ります。雌は出てきて雄から餌を受け取ると獲物の毛や羽根をむしり雛が食べやすい状態にて運びます。確認できた餌はネズミ、トカゲ、カエル、スズメ、カワラヒワ、ツバメなどでした。最初は雌が巣の中で小さくちぎって順番に雛へ与えていました。数日すると雛も驚くスピードで成長し、大きくなった雛には獲物をそのまま投げ入れ自分で食べさせます。遅く生まれた雛には親がちぎって平等に与えている様でした。5月の連休が終わる頃に雛はみんな産毛が抜け始めていました。



餌のカワラヒワを運ぶチョウゲンボウ雄

工事の開始

5月7日に、いよいよ工事が始まりました。すると打ち合わせ通り行くはずが巣の目の前まで足場が組まれ様としており、地元で観察されていた方がビックリして、このままでは営巣放棄されて雛が育たないのではと心配して私のところへ連絡してきてくれました。案の定、親鳥は巣の真下に作業員がいるため、警戒して巣へ近づくのをお断りしています。それでも人がいない時を見計らって巣へ飛び込み餌を与えていました。私も夕方に見に行くとその様な状況が続いていたため、作業員の方に頼み巣の周辺にあまり近づかない様に依頼し、鳥からなるべく距離を取ってもらって、事なきを得ました。やはり鳥の習性を良く知っている人と一般の人では距離感が違うのだと痛感する出来事でした。その後、もう一度関係者と擦り合わせをして十分に配慮していただくことができました。

巣立ちの時

関係者に配慮していただいたお陰で、親鳥はまだ警戒しつつも順調に餌運びを続け、雛も立派な姿へと成長しました。5月24日には巣の中で大きくなった雛5羽が羽ばたきの練習を始め抜けた産毛がたくさん舞っていました。そして身乗り出して餌を貰えるのを待っています。やがて親が入って来ると我先にと餌へ飛び付きます。満腹になると興味深げに外を見ながら各々羽ばたきの練習をしていました。巣立ちはもう目の前です。そして5月27日早朝に次々と飛び立って行き、午前中には全ての雛が巣立ちを迎え、橋の工事用足場などへ移り終えました。

しばらく雛は足場や橋脚で親が餌を持って来てくれるのを待っており、初めて見る周辺の景色を楽しむかの様に眺めていました。



無事に巣立った雛 撮影：岡崎 かおり

最後に

雛達は最初工事用の足場から離れるのもおっかなびっくりでしたが、徐々に周辺の民家の屋根や電柱に移り飛ぶ練習を始めました。まだ親からの給餌に頼っていますが、そのうち自ら狩りを始めなければなりません。今回は工事が行われると言うアクシデントはありましたが、地元で観察されていた方や当会とは別に発注者へ保護を要請していただいた地区の自治会、工事関係者の協力もあり、無事巣立ちすることができました。

巣立った雛もこれから困難に直面する事もあるでしょうが、成鳥となり次に命を繋いでいてもらいたいですね。皆さんも鳥の繁殖を見つけたら遠くからそっと暖かく見守ってやってください。



飛ぶ練習で足場にぶつかる幼鳥

滋賀、岐阜、三重、愛知各県における近年のカワウ個体数変化



津市 平井 正志

はじめに

カワウは1970年代までは比較的数の少ない鳥であった(福田ら 2002)。愛知県知多半島のカワウコロニー、鶺鴒の山は1934年に国の天然記念物に指定された。鶺鴒の山の個体数は1980年代より徐々に増加した。この頃、琵琶湖でもカワウの数が増加している(石田ら 2000)。著者は「しろちどり 84号」に三重県内のカワウコロニーの状況について概説した(平井 2015)。ここでは三重、滋賀、岐阜、および愛知の各県から、カワウ個体数の情報を得て、解析する。

データの収集と結果の表示

滋賀、岐阜、三重、愛知の4県のカワウの個体数調査の結果、および駆除数を県の担当者の協力を得て集めた。一部は県のホームページからデータを得た。また、三重県紀伊長島赤野島のカワウについては環境省の事業に基づく、平成29年度紀伊長島鳥獣保護区カワウ保護管理対策業務報告書(著者不詳 2018)から得た。各県から得られたカワウ生息数、駆除数をグラフで示す。横軸は年ではなく年度である。各県で概ね、3月、7月、12月の3期に生息数が計測されているが、計測月のズレや欠測

などがあり、同一月の調査結果を表示することが難しい。それぞれ、グラフに表示した数値の観察月は県ごとに異なる。

滋賀県:各年度5月の個体数とその年度の駆除数が提供され、それらをグラフにした。

岐阜県:各年度12月のものを集計した。一部1月のデータを入れた。今度ダム(御嵩町)、岩屋ダム(下呂市)、および船附保護区(大垣市・養老町・輪之内町にまたがる)の生息数も示す。

三重県:三重県では2015年度から3月のみの1回の調査になったので、3月のデータをグラフで示した。ただし、紀北町紀伊長島赤野島のデータは加えず、別図に示した。

三重県紀北町紀伊長島赤野島:グラフは12月の罫(ねぐら)入り数を示す。12月に2回以上計測している場合には最大値を取った。12月の最大値がその年度の最大値であった場合が多いが、別の月に最大値が記録されている場合には▲で表示した。

愛知県:各年度12月あるいは11月の値をグラフ化した。全県の生息数、弥富野鳥園、知多半島鶺鴒の山の生息数を表した。

カワウ個体数の増減 各県での個体数の増減

滋賀県では琵琶湖で、カワウが増え、2008年には4万羽近くに達した。琵琶湖での漁業被害が深刻になり、大掛かりな駆除を2006年から始めた。従来の猟友会などアマチュアの猟師ではなく、職業射撃手が空気銃で撃つ、効率の良い方法で、駆除した。図1に示すように駆除数は膨大で、ほぼ、生息数と同数を駆除している。生息数は2010年から急激に減り、現在では6,000羽から7,000羽で推移している。ただ、近年は駆除にも関わらず、減少が目立たない。

岐阜県のカワウは愛知や滋賀に比べ個体数が少ない。2005年には全県で約3,300羽であったが、以降減少した。2005年以前には内陸の岩屋ダム、今度ダムなどでも多くのカワウが見られたが、現在では県南部、揖斐川と牧田川の合流地点近くの船附保護区にほぼ限定される。近年ではそれに加え、同じく県南部で三重県、愛知県とまたがる千本松原にも集中している。



カワウ

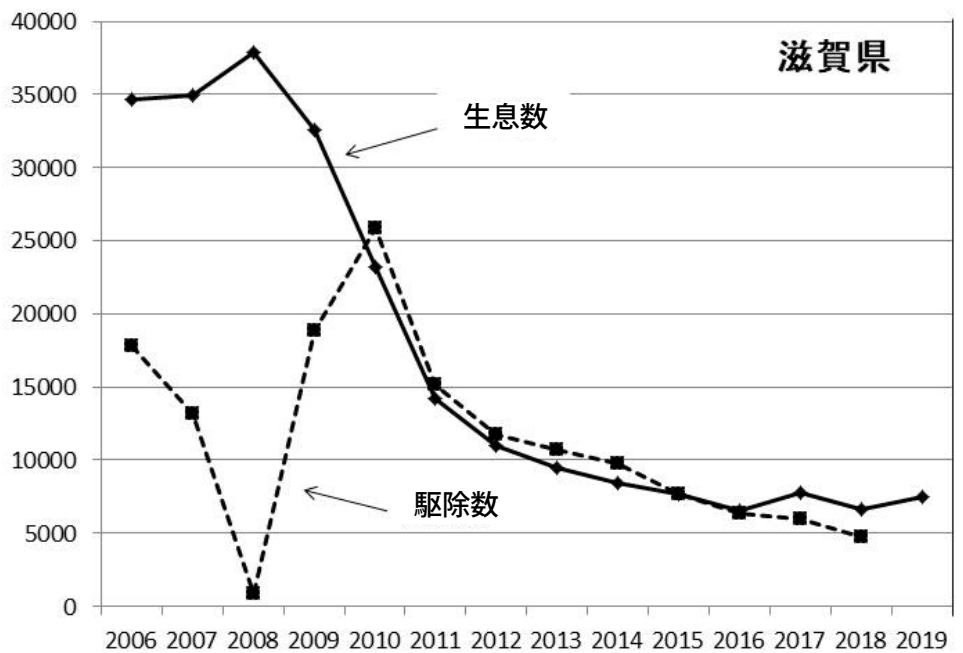


図1：滋賀県でのカワウの個体数変化

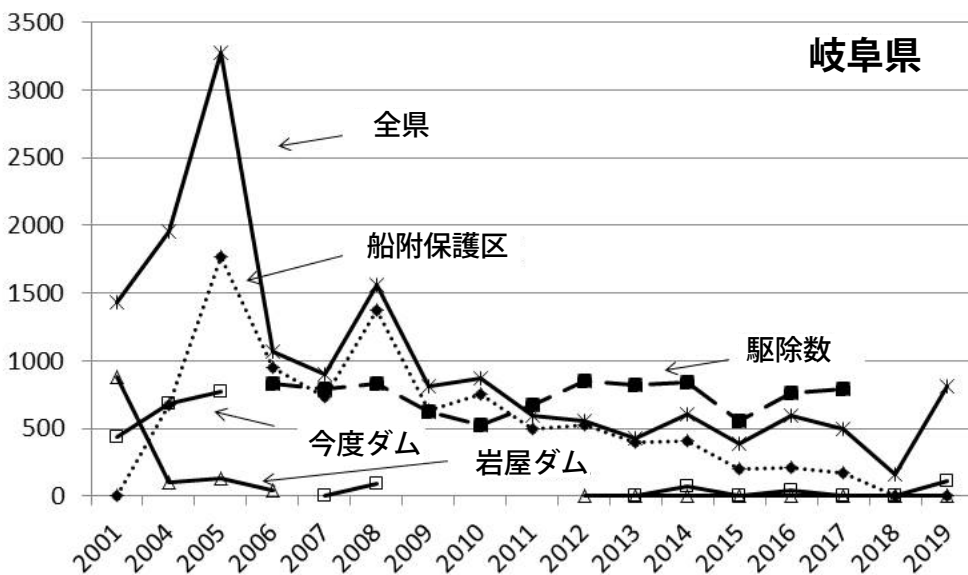


図2：岐阜県でのカワウの個体数変化

三重県でのカワウ個体数を図に示す。ただし、紀北町紀伊長島の赤野島の個体数は差し引いている。2009年には8,000羽を越えるカワウが観察された。しかし、その後減少を続け、今回2020年3月の調査では約2,000羽であった。減少は全県的である。上記の赤野島での個体数変化は、環境省が紀伊長島鳥獣保護区の植生保全を目的とした事業の中で、調べ、かつ、カワウ駆除を行っている。図3に示すように、駆除数は観察された個体数に比べてわ

ずかであったが、個体数は減少し、現在では500羽以下となっている。

愛知県では県内のカワウ生息数の大半（平均75%、最低でも60%）が弥富野鳥園、および知多半島の鶴の山で観察された。また、県東部渥美半島の田原、あるいは初立池でも相当数のカワウが生息した時期があった。2009年までは増加傾向にあり、全県で30,000羽以上を記録している。ピーク時は2008年2009年であり、その後減少傾向にある。しかし、弥富野鳥園では減少は緩やかで2015年でも10,000羽以上を維持していた。しかし、その後、2019年には減少したが、鶴の山では逆に増えた。この2コロナ一問でのカワウの移動が考えられる。グラフは12月の調査結果であるが、2020年3月では野鳥園、鶴の山合計で15,183羽であり、減少は顕著ではなかった。

4県での増減をまとめると、カワウは2000年以降各地で増加しており、2005年から2009年に各地でピークとなり、その後は急激に減少している。ただ、愛知での減少はかなり緩やかであった。

なぜ、カワウの個体数がこのように変化したのか？第一に想定されるのは餌資源の増減であろう。しかし、滋賀県のカワウは琵琶湖、岐阜県のそれは木曾三川とその支流、三重県のカワウは伊勢湾、愛知県の場合は伊勢湾および三河湾、赤野島のカワウは熊野灘と別々の魚類資源を餌としている。また、その資源には淡水魚と海水魚が含まれる。これらの地域の魚類資源が同じように変化しているとは考

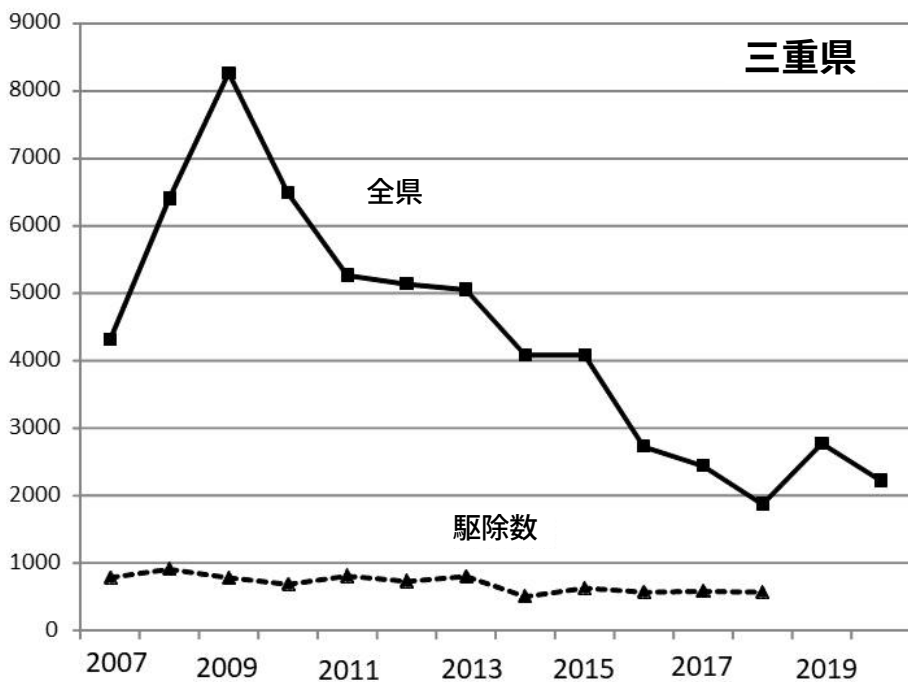


図3：三重県におけるカワウ個体数変化

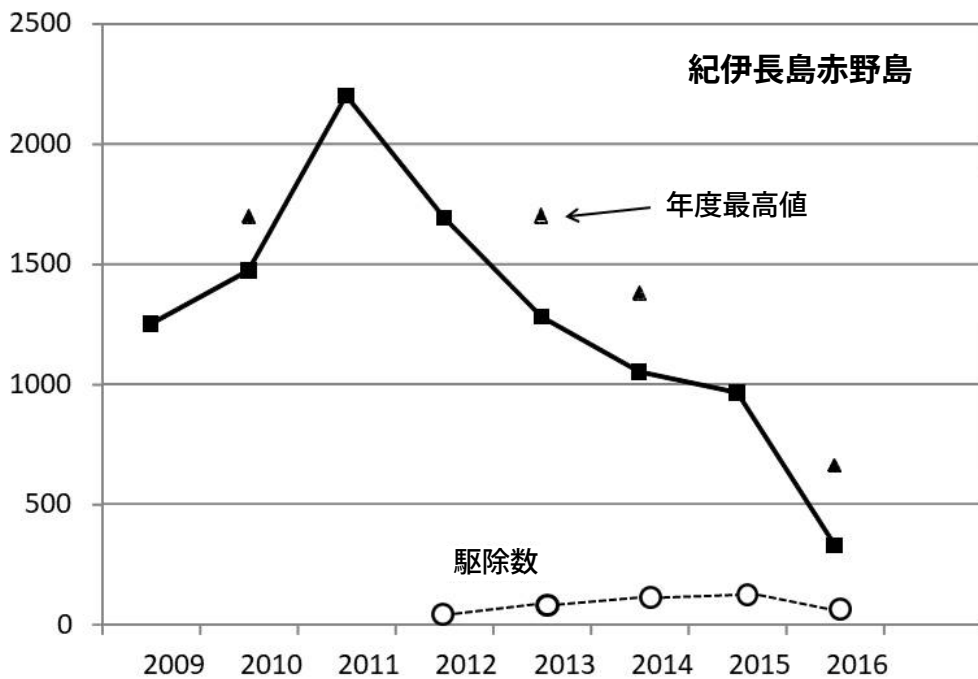


図4：紀伊長島赤野島におけるカワウ個体数変化

個体数増加の要因

なぜ、カワウの個体数がこのように変化したのか？第一に想定されるのは餌資源の増減であろう。しかし、滋賀県のカワウは琵琶湖、岐阜県のそれは木曾三川とその支流、三重県のカワウは伊勢湾、愛知県の場合は伊勢湾および三河湾、赤野島のカワウは熊野灘と別々の魚類資源を餌としている。また、その資源には淡水魚と海水魚が含まれる。これらの地域の魚類資源が同じように変化しているとは考

えにくい。

カワウの場合は集団繁殖であり、ねぐらも集団である。適切なねぐらやコロニーの確保は生息、繁殖に大きな影響を持つ。しかし、この点でも各県、個々のねぐら、コロニーの条件は様々であり、このような類似の増減を説明することは難しい。

福田ら（2002）は1970年代までのカワウの減少が狩猟圧によるものと推定している。1923年から1947年までで、年間約5,000羽（一部ウミウを含む）が狩猟などで捕獲されていた。当時のカワウの個体数を考えればそのような狩猟圧であったと推定し、また、それ以外に統計に残らない、駐留米兵による狩猟もあったと推定している。

この時代は強毒性の農薬が使われた時代であり、捕食性のカワウにその影響が出た可能性も否定できない。

琵琶湖では1979年に竹生島で20－30羽との記録がある程度であったがその後増加している（石田ら2000）。1980年代、琵琶湖はカワウにとって、未利用開拓地であったわけで、竹生島という絶好のコロニーが確保でき、急激に増加したのであろう。同じ時期に愛知県鶉の山でも増えているし、三重で

もコロニーが観察されるようになった。これら琵琶湖以外での増加の原因は不明であるが、狩猟者の高齢化、きびしい猟銃規制による、狩猟圧の低下も考えられる。また、琵琶湖で増加した個体の流入も考えられる。

ピーク時からの個体数減少の要因

人為的駆除は琵琶湖でかなり多く、滋賀県での減少のかなりを説明できるであろう。また、岐阜県でも生息数とほぼ同数の個体を駆除しており、人為的な駆除が果たして役割は大きい。しかし、愛知、三重では駆除数は生息数に比較してごく少なく、到底減少を説明できない。赤野島の減少も駆除以外の自然減があると考えられている（著者不詳2017）。愛知での減少は穏やかである。

三重県のカワウは夏と冬で定期的な変動があり、冬は南方へ移動していると考えられる（平井2015）。カワウの飛翔力が強く、この4県間では頻繁に行き来していると考えられる。琵琶湖で行われている駆除がこの愛知、三重のカワウの減少に寄与している可能性は高い。また、石垣池は道路建設のため、環境が大幅に悪化した。しかしそれ以外の要因、伊勢湾における漁業資源の増減が三重および愛

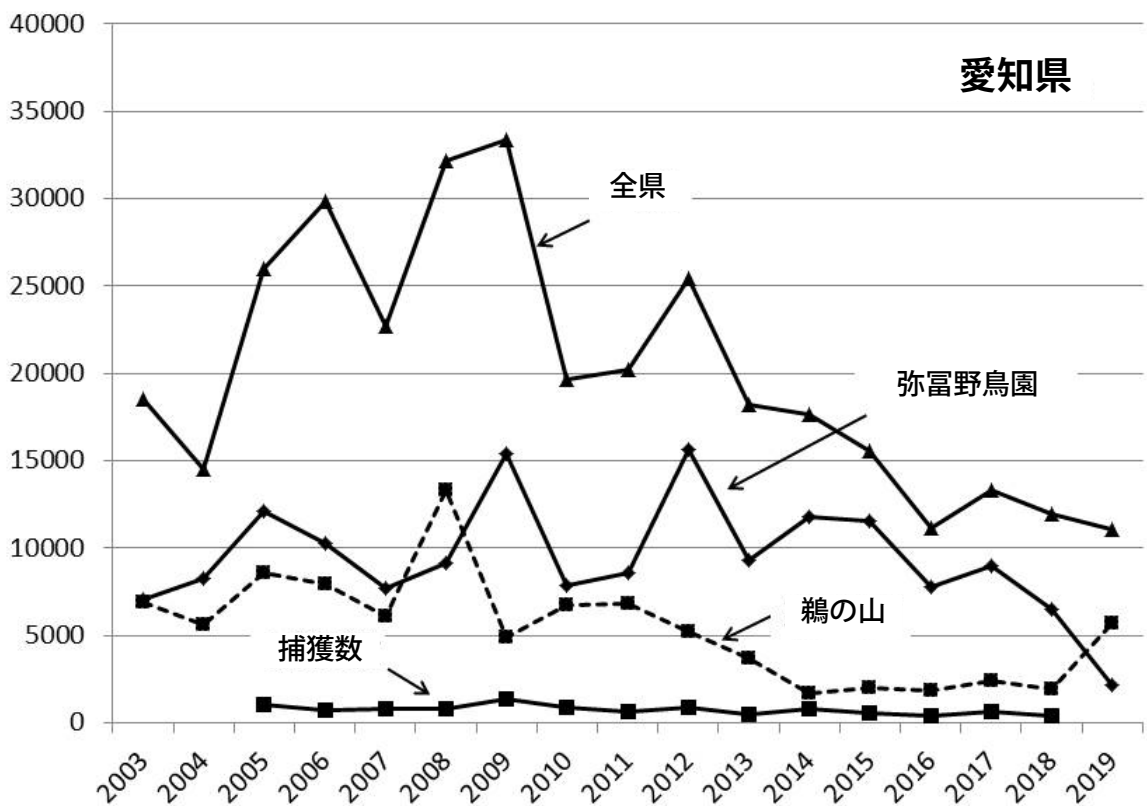


図5：愛知県におけるカワウ個体数の変化



図6：三重及び近県のカワウの
主なコロニー

知のカワウの減少のひとつの要因である可能性も否定できない。

しかし、愛知県での減少は当初、緩やかであり、とりわけ、弥富野鳥園では2015年までほぼ一定の個体数が、維持されてきた。なぜなのか不明である。

しかし、コロニーが野鳥観察施設という特殊事情があり、カワウの繁殖、ねぐらとして好適な条件があったと考えられる。

近年は琵琶湖での駆除も5,000羽内外となっている。琵琶湖では個体数そのものが減っているため、現状以上の駆除は望めない。愛知、岐阜、三重3県での駆除も狩猟者の高齢化を考えれば、駆除数が今後、さらに減少する可能性がある。このまま推移するとカワウの個体数が再び、増加する可能性は捨てきれない。

参考文献

石田 朗（年次不詳）愛知県のカワウの生息状況の変化

https://www.env.go.jp/nature/choju/effort/effort5/effort5-3d/joukyu/kawau_2.pdf 2020/6/10 閲覧

石田 朗、松沢友紀、亀田佳代子、成末雅恵（2000）日本におけるカワウの増加と被害一地域別・問題別の概況と今後の課題 — Strix 18:1-28.

加藤 ななえ（年次不詳）カワウの生態、被害への対応

<https://www.env.go.jp/nature/choju/effort/effort5/effort5-3d/syokyu/kawau.pdf> 2020/6/11 閲覧

著者不詳（2018）平成29年度紀伊長島鳥獣保護区カワウ保護管理対策業務報告書，中部地方環境事務所
平井正志（2015）三重県カワウコロニーと紀伊長島赤野島カワウ駆除問題 しろちどり84号:1-4.
福田道雄、成末雅恵、加藤七枝（2002）日本におけるカワウの生息状況の変遷。日本鳥学会誌 51:4-11.

編集部よりお知らせ

今回、新型コロナウイルス対応により、探鳥会が開かれず、会員相互の交流が疎くなったので、会報の発行間隔を縮めました。そのため、連載「シギ・チドリ類の年齢・季節による羽衣の変化」はお休みします。次回をご期待ください。

原稿募集

編集部では会報「しろちどり」に掲載する原稿を募集しています。

「ひとり探鳥」は 探鳥会報告の形式と同じ形式で掲載しますので、探鳥者名、日時、場所、出現した鳥名、コメントをお寄せください。むろん写真もOKです。探鳥会が平常通りに行われていても「ひとり探鳥」は掲載しますので奮ってご投稿ください。

「写真」も随時募集します。複数枚の組写真もOKです。簡単なコメントを付けてください。また「イラスト」も随時募集しています。（編集部）